ちょっと名大史

236

シンポジオン ― 自由で生き生きとした学術交流の場として ―

シンポジオンは、2007（平成19）年の工事で豊田講堂と一体化するまでは、「名古屋大学シンポジオン」という独立した建物でした。名古屋大学創立五十周年記念事業後援会から建設寄附され、1992年4月に開館しました。

創立50周年の事業として記念施設を建設することは当初から決まっていましたが、名古屋大学創立五十周年記念事業委員会で本格的に検討されるようになったのは、1989年に一連の記念行事が終了してからです。その結果、竹中工務店の設計・施工により、ツイン2室・シングル8室の宿泊室、ティーラウンジを含め100席程度の食堂、300名収容の会議室などを備えた施設を建設することになりました。当時の名大は、海外を含めた学外者を迎えてのしかるべき行事にたえうる、宿泊施設、食堂、大会議室を切に必要としていたのです。

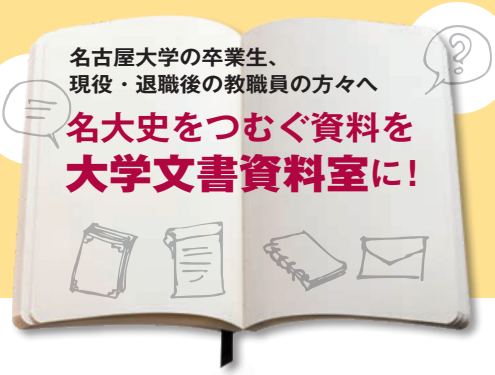
なかなか決まらなかったのが建物の名称です。当初は「名大会館」、のちに「名古屋大学会館」とされましたが、いずれも仮称のままで検討が進められました。そのほか、「名古屋大学五十周年記念会館」、「名古屋大学メモリアルホール」、「不老会館」、「東山会館」など多くの案が出ましたが、容易には結論に至りませんでした。

「名古屋大学シンポジオン」が案として登場したのは1991年秋と意外に遅く、農学部からの提案の1つだったようです。西洋古典文学が専門の小川正廣文学部助教授（現名誉教授）から、この語は古代ギリシア語で饗宴の場所という意味があるが、シンポジウムの原語でもあり、学術交流の場を表す名称とすることは斬新で、言語創造の意図を感じさせる、との見解が示されて有力候補の1つとなり、1992年1月にようやく決定しました。

完成時の『利用案内』で小川助教授は、「名古屋大学シンポジオンは、古代ギリシア人の知的創造の精神にさかのぼりながら、自由で生き生きとした学術交流の場となることをめざしています。」と書いています。

1　着工当初の様子（1991年4月12日撮影）。初期は職員会館の南隣が考えられていたが、豊田講堂と一体的に運用できるよう、その東隣に建てることになった。
2　1991年10月2日の様子。右端上に見えるのが本部1号館。
3　完成後のシンポジオン。その先進的なデザイン、機能性等が高く評価され、1992年の中部建築賞を受賞した。
4　豊田講堂とシンポジオンをつなぐホワイエ（右側がシンポジオン、2007年12月27日撮影）。現在は、「豊田講堂・シンポジオン」と表記されることが多い。

BRIEF HISTORY OF NAGOYA UNIVERSITY



■ **在学時の配布物**
（学生便覧、シラバス、試験問題、課外活動の資料…）
■ **教育・研究活動、大学・部局運営に関する資料**
（各種書類、会議のメモ、備忘録、スクラップ記事、写真…）
■ **校費による印刷物・刊行物**
（冊子、パンフレット、ポスター…）
■ **ご退職関係の記念冊子・記念論集・業績集…　　など**

※その他、ご処分予定の資料についても、まずは下記へご一報ください。

東海国立大学機構大学文書資料室
TEL 052-789-2046
Mail nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp